東教大移転本決まり
文学部評議員は退席

キャンパス移転問題から紛争中の東京教育大学（宮島竜興学長代行）は、二十四日の評議会でさきにまとめた「新大学構想」にもとづく筑波学園都市への移転を全学の意思として最終決定した。移転問題の焦点はこれで対文部省交渉に移る。しかし、この日の評議会をはじめすべての重要決定が機動隊に守られて行なわれるなど、学内が一本化していないことから今後もこの"最終決定"をめぐりさらに紛争が続きそう。

教育大学の将来を決めたこの日の評議会は、学内の学生を会議の場所で排除したあと、午後五時すぎから開かれた。冒頭、文学部評議員から「移転問題についての一連の決定がすべて機動隊制圧下で行なわれ、一方的に強行されている」と抗議、責任者の不信任動議が提出された。このため移転問題は同提案を否決して文学部評議員が退場する中で行なわれ"全員一致"で全学の意思として決定された。

"新大学構想"は、今月四日の評議会でまとめたもので、単なるキャンパス移転だけでなく"内容移転"するプラン。学部制、講座制を廃した大学院中心の総合大学として改組し、大学の執行力を強化するため副学長制をとり入れるなど、管理体制を学長に一元化することを骨子としている。

同大では二月二十八日、機動隊を導入して以来特に許可された学生以外の入構、受講を禁じて「正常化」を進め、特に移転問題が最終段階にはいった七月一日以後は機動隊を構内に常駐させ、学生、教職員に対する監視を強化、教授会・評議会の開会に備えてきた。

7/25 毎日 朝刊

移転派と"協議離婚"
"ユニオン大学"創造したい
教育大 反対派教官が表明

東京教育大の筑波移転問題は政府・自民党のモデル大学構想とからんで微妙だが、移転反対派の和歌森太郎文学部教授ら約十人は二十五日「賛成派と"協議離婚"して教育大を二分するのもやむを得ない。われわれは東京・大塚の現キャンパスに残ってモデル大学と対抗する"ユニオン大学"を創造したい」と語った。文部省内にも"協議離婚"やむなしとする空気もあり、移転をめぐる教育大教官内部の対立は大学二分にまで発展しそうな様相である。

和歌森教授をはじめ林建三理学部、家永三郎文学部、星野慎一文学部各教授ら移転反対派の教官代表は同日、文部省を訪れ「教育大評議会は二十四日、新大学構想実現をめざして筑波移転を最終的に決めたと伝えられている。しかし、文学部はこの決定に参加しておらず、文学部以外の在籍教授会構成員の半数をわずかに上回る五七％の賛成票があったにすぎない。このことを考慮したうえ、移転問題で誤りのない措置をしてほしい」と、教官百六十二人の要望書を坂田文相、天城事務次官らあてに提出した。

このあと記者会見し「賛成派が移転を強行する以上、われわれにも妥協の余地はない。移転したい教官だけが教育大を抜けて筑波へ行けばよい。"協議離婚"のほかに道はなくなったようだ」と大学を二分する決意を明らかにした。

どうしても筑波に移転できない理由として「筑波に建設される大学は巨大科学にも取組めるように工学部だけでも教官数五百人の大規模なものである。私は巨大科学は各大学が協力し合う共同利用研で取上げるべきだと思っており、学術会議を通して素粒子研究所をいそいでいる。筑波構想は現代科学のためにも好ましくない」（林教授）「大学は文理のバランスがとれてこそ発展する。文学部がワキ役になって一般教養のようなものだけ担当させられてはたまらない」（星野教授）「筑波移転反対からはじまった紛争が、移転で解決するはずがない」（和歌森教授）と述べ、対立の根深さをのぞかせた。

反対派教授らが描いているこれからの大学は、モデル大学に対抗する"ユニオン大学"。賛成派教官を除いて基礎科学中心の大学に縮小再編、講座制を否定して現代科学の要請にこたえる。そして、教育大が基礎科学を担当、工学の東京工大、医歯学の東京医歯大、芸術の東京芸大、教育学のお茶の水女子大など、東京の既設の国立大と一体となって"ユニオン"をつくり、必要に応じて教官や学生が交流する方策を考えるという。

7/26 毎日 朝刊